

1歳児たちのケーキづくり

～ 子どもたちと保育士との2ヶ月にわたる対話的保育実践 ～

社会福祉法人喜慈会 子中保育園

2017年

1歳児たちのケーキづくり

～子どもたちと保育士との2ヶ月にわたる対話的保育実践～

社会福祉法人喜慈会 子中保育園

保育実践者 篠香澄・桑田幸生

レポート作成者 大塚裕子

はじめに

<本報告の概要>

本報告は、1歳児が自ら行っていた廃材を活用したケーキによるお誕生会ごっこの遊びをきっかけに、1歳児が自分たちで本物のケーキづくりまでを行った活動記録です。一連の活動は、保育士の計画や指示通りに子どもたちが行動したものではなく、子どもたち自身が遊びを選んでいきました。子どもたちが遊びを選ぶ際、子どもたち自身の選択が可能になるように、保育士たちは複数の選択肢を備えた予測的な環境の整備や支援を行いました。また、環境構成や支援の準備は子どもたちとの対話や子どもたちの反応によって進めました。そのような対話的かつ連続的な実践は、子どもたち自身による遊びとして展開し、ケーキ屋さんでのお買い物リアル体験や本物のケーキづくりが実現しました。すなわち、遊びの中で<食>への興味・関心を醸成し、<食>に関わる様々な行為・事柄を体験するという<食育と保育の融合>が実現できたと考えています。この一連の保育実践は2017年9月の中旬から10月末のケーキづくりまでを一つの事例として捉えています。

<本報告の構成>

本報告は、一連の活動において、子どもが行為主体であるときの対象行為を五つの動詞で表現しました。これらの動詞がこれから示す五つの各活動、すなわち各章の象徴的な概念となっています。1章は<みたてる>。一連の実践のきっかけとなるお誕生会ごっこは1歳児たちの見立て遊びでした。その遊びをさらに展開させるため、保育士たちはいくつかの環境構成を行いました。ひとつは“ごっこ遊び”への展開を見据えたキッチンコーナーの作製、もうひとつは造形あそびへの展開を見据えた装飾素材の準備です。2章は<まねる>。1章に示したキッチンコーナーの整備から、子どもたちによってままごと遊びやケーキ屋さんごっこに展開された真似る遊びについて示します。3章は<かたどる>。1章に示した保育士による装飾素材の準備と促しから発展した空き箱ケーキ制作について述べます。この造形あそびは、保育士が本物のケーキづくりの展開まで視野に入れており、子どもたちはクリームに見立てた水溶き小麦粉を空き箱に塗り、様々な飾りつけをしてケーキを協調的につくり上げる姿を見せていました。4章は<たしかめる>。ケーキ屋さんでのお買い物体験が主活動ですが、様々な<たしかめる>が含まれています。これまで子どもたちが遊んできたケーキ屋さんごっこのケーキ屋さんがどんな所かを<たしかめる>、5章で述べるケーキづくりのために本物のケーキを<たしかめる>、そして、保育士にとっては子どもたちがケーキを食べるかどうか、子ども用包丁で切るという動作ができるかどうかを<たしかめる>。5章は<つくる>。ヘラや子ども用の包丁等の道具を用いて、実際にケーキづくりに挑戦する1歳児の姿を示します。空き箱ケーキ制作やお買い物体験のおかげで、飾り付けには子どもたちがこだわりを見せました。

なお、保育士たちの選択肢を備えた予測的な環境構成のもと、子どもたちがどのように遊びを選び取っていったかを示すプロセスを図解したものがA3サイズのポスターです。併せてご覧ください。

1章 みたてる <ケーキに見立てる> 9月中旬～9月下旬

2017年9月の中旬頃から、牛乳パックやトイレットペーパー、サランラップの芯などを使った廃材あそびを始める。元々は、牛乳パックをサランラップの芯などで叩いて音を楽しむ太鼓遊びや、廃材を踏んだり潰したりする



(1) (2) (3)



(4) (5) (6)



(7) (8) (9)

写真 1-1 1歳児 A と B のお誕生会ごっこ

「園庭で、牛乳パックを持って砂遊びをしてみた。最初は、K と R は牛乳パックに砂を入れる遊びをしていたが、個々に遊んでいた(1)。だんだんと二人がそばにより始め、しばらくすると、二人で自分の持っていた牛乳パックを隣同士に置き、個々に牛乳パックの中に砂を入れたり、お互いの牛乳パックに入れ合ったりしていた(2)。途中から1つの牛乳パックになり、そこには上まで砂がいっぱいになるほど砂を詰めていた(3)。そのうち K が木の枝を持ってきた。それを砂でいっぱいになった牛乳パックの一番上に立たせた(4)。K が「ハッピーバースデー」を歌い始める(8)と R も一緒に歌い出す(9)。今度は R が葉っぱを乗せて再び歌い遊んでいた。」

この状況について、篠は次のように感想・評価を保育日誌に記録している。

「牛乳パックに砂を入れることは想像がついていたが、牛乳パックに詰めた砂をケーキにし枝や葉っぱを飾りに見立てお誕生ケーキを作り出したことに驚いた。子どもたちが白っぽい砂をかけた時(6)や、枝を立てた時(4)には、子どもたちのイメージしているものと保育士がイメージしているものと同じか確かめるために、「これはお砂糖?」「ロウソクだね」と声かけをすると、やはり同じであった。身の回りの物を見立てて遊んでいることに感心した。日頃の経験や見たものをよく観察し、遊びと運動できていると推測した。今後も様子をじっくりと見ていきたい。」

この翌日、篠は R の母親から、R が帰宅後も玩具を使ってケーキづくりの遊びをしていたという話を聞いた。また、話を聞いた20日も R をはじめ1歳児たちは園庭で牛乳パックを使いケーキづくりの見立て遊びを楽しんでいた。9月21日には、園庭で遊ぶ前に、“おさるのスペシャルジュース”という絵本を読んだところ、園庭でジュースづくりとケーキづくりが始まった。篠と桑田はこの数日間の子どもの様子から、“子どもたち自身に本物のケーキを作らせたい”というビジョンを持つようになった。

私たちが一連の活動において<ケーキ>というテーマを重視したのは、ケーキが子どもたちから発信された、かつ協調的な遊びの中から生じた言葉(概念)であり、ケーキへの見立てという高度な類推能力を1歳児が行動として示したことによる。子どもたちと保育士が対話的に保育実践を行っていく際の共通基盤であり、大事な概念だと認識したからである。

このような認識のもと、篠は子どもたちがより一層、ケーキへの関心を持ち、ままごと遊び、ケーキづくりにも広がる可能性を見据えて、牛乳パック等を活用し写真 1-2 のようなキッチンコーナーを作製した。子どもたちのケーキへの関心を大切にし、遊びが散漫になることを避けるため、写真のように食材玩具はケーキや菓子だけに絞った。また、調理器具の玩具については子どもたち同士の貸し借りを促すため1個ずつ準備した。準備の時点で、子どもたちによる遊びの選択肢としては、ままごと遊びの深化・多様化、ケーキ屋さんごっこへの展開などの可能性を予想していた。

触覚を楽しむ感覚遊びが中心であった。9月19日に初めて園庭で牛乳パックを出した際の様子について、保育士・篠は次のように保育日誌に記録している。(下線と番号はレポート作成者による。番号は写真 1-1 に対応している)

「園庭で、牛乳パックを持って砂遊びをしてみた。最初は、K と R は牛乳パックに砂を入れる遊びをしていたが、個々に遊んでいた(1)。だんだんと二人がそばにより始め、しばらくすると、二人で自分の持っていた牛乳パックを隣同士に置き、個々に牛乳パックの中に砂を入れたり、お互いの牛乳パックに入れ合ったりしていた(2)。途中から1つの牛乳パックになり、そこには上まで砂がいっぱいになるほど砂を詰めていた(3)。

そのうち K が木の枝を持ってきた。それを砂でい



写真 1-2 環境構成1: キッチンコーナー



写真 1-3 環境構成2: 装飾の準備

子どもたちのケーキへの興味関心が造形表現に展開する可能性も視野に入れ、写真 1-3 に示す装飾や空き箱などを準備した。日常的な廃材あそびの影響も考えると、造形としてのケーキ制作も遊びの選択肢となることを予想していた。

2章 まねる <ままごとでケーキ調理を真似る・ケーキ屋さんを真似る> 9月下旬～10月中旬

1章に示した環境構成により、子どもたちは、予測どおり、ままごと遊びを楽しむようになり、毎日のように登園してすぐにキッチンコーナーに駆けつける日々が続いた。



写真 2-1 ケーキをめぐる遊びの展開(おままごと)

この段階で重視したことは、本物のケーキづくりを見据え、ままごと道具であっても本物と同様の使い方を子どもに伝えることである。例えば、包丁はキッチン台の場所だけで使う、人に向けてはいけない、振り回してはいけないというルールを作り、子どもたちに伝えた。



写真 2-2 ケーキをめぐる遊びの展開(ケーキ屋ごっこ)

“本物をつくるために、本物を、本物のように使う”、これも篠と桑田が保育実践上、大切にしたことである。

写真 2-1 に示すように、子どもたちは泡だて器や包丁などの道具も使いこなすようになった。また、きれいな箱にケーキの玩具を並べ入れる遊びもするようになった。ままごと遊びから、写真 2-2 のようなケーキ屋さんごっこへの展開は、次のような経緯による。

ままごとに興味を持った0歳児 K と Y に対して、桑田も加わり、ままごと遊びをしていた。玩具が足りないことに気づいた桑田が、傍らで買い物バッグを持って遊んでいた1歳児たちに、「すみませーん、コップを買ってきてください」と声掛けしてみた。すると、1歳児のひとりがコップを取り、「はい、どうぞ」と持ってきた。“買ってくる”という概念が子どもたちと共有できていることに気づいた桑田は、ケーキをめぐる遊びと買い物ごっこを結びつけ、さらに遊びの幅を広げるため、ケーキを台の上にきれいに並べ、ケーキ屋さんをつくり遊びを促そうとした。「ケーキ屋さんです。いかがですか?」と声を掛けると、1歳児たちは買い物に来て、ケーキ屋さんごっこも始まった。

ケーキ屋さんごっこは次のように展開していった。1歳児たちは買い物袋を持って「行ってきまーす」と発話する。保育士による上述のケーキ屋さん子どもがやって来て、「ください」と保育士に話しかける。「どれがいいですか?」と保育士は子どもたちに選ぶよう促した。子どもたちが選んだケーキをかわいい箱に詰めて子どもたちに渡す。ケーキを受け取った0歳児 K は、くつろぎコーナーに行き箱を開けると「うわ～、おいしそう」と発話した。

以上のような対話をしているうちに、お金が必要なことに保育士が気づき、「お金ください」と子どもたちに問うたところ、子どもたちはお金を渡す動作をした。その場で急ぎお金に見立てた紙を子どもたちに渡し、ケーキ屋さんごっこの深化を図った(写真 2-2)。

3章 かたどる <ケーキを模る> 9月下旬～10月下旬

篠・桑田は、ままごと遊びやケーキ屋さんごっこからの展開として、子どもたちが<自分でケーキをつくる>というイメージまでも遊びの選択肢にできるように、空き箱を使ったケーキ制作の準備を始めた。1章に示した見立て遊びの後、iPad を用いて子どもたちにケーキの画像を見せた。画像を見せると、子どもたちから「ケーキだ!」という言葉が出た。篠が「ケーキの上に何がのっているかな?」と問うと、子どもたちは「イチゴ」「バナナ」など様々な言葉を発した。それらの発話に応じつつ、篠も「これはクリームだよ」「甘いんだよ」などケーキについて話

した。画像を毎日見せるうちに、「食べたーい」という言葉が出るようになった。

これらの段階を踏まえ、1章で示した装飾素材や空き箱を用いてケーキデコレーションの遊びを促すことにした。このデコレーションの試行は、空き箱ケーキ制作の前に数回繰り返された。子どもたちは写真 3-1 のように集中して、また相互に協力的に共同作業を進めた。このような様子を確認したうえで、空き箱ケーキ制作を進めることにした。制作の準備として、ケーキの画像だけでなく、ケーキづくりの動画も子どもたちと共に確認した。とくに生クリームの塗り方について詳しく示された動画を見た。

空き箱ケーキ制作では、ケーキデコレーションの発展形として、水溶き小麦粉を生クリームに見立てて四角い空き箱に塗り、装飾素材でデコレーションした。始める際、ケーキ制作のための空き箱を見せながら、篠が「今日は白い箱に生クリームを塗る練習をします。やってみる？」と1歳児たちに話しかけると、「うん」とうなずく、「やりたい」と発話するなど反応があった。この活動は本物のケーキづくりを視野に入れて実践したため、写真 3-2 のように、子どもたちにエプロンを着け、注意点を説明しながら、本物の料理のような段取りを大切にした。道具をきちんとテーブルに並べ、小麦粉の水溶きのしかたなども説明しながら、子どもたちにクリーム状に混ぜるところから行かせた。篠が水溶き小麦粉の塗り方を見せてから子どもたちにヘラやスプーンを渡すと、K と R がすぐに表面を塗り始めた。とくに、R は箱の側面を丁寧に塗った。この行為はお手本としての動画視聴によるものと考えられる。飾りつけの際にも、K と R は動画視聴の影響と思われる行為を見せていた。例えば、同じ色合いや同じ種類の飾りが並んでいる際には別の場所へ移動させ、飾りの無い箇所を埋めていくなど、デコレーションのバランスを考えながら行っていた。これは、5章の〈つくる〉における果物の飾りつけにも見られたこだわりである。



写真 3-1 空き箱ケーキ制作の試行



写真 3-2 空き箱ケーキ制作(左上より右に向かって時系列)

4章 たしかめる <本物を確かめる> 10月27日

ここで示すのは、1歳児たちによるケーキ屋さんでのお買い物リアル体験である。園長が予め近所のケーキ屋さんへ依頼し、0歳児および1歳児クラスの子どもたちは、篠、桑田、調理師・高塩とともに散歩車に乗ってケーキを買いに出かけた。このお買い物体験には、これまでの活動についての様々なたしかめる>が含まれていた。

一つめは、2章に示したままごと遊びやケーキ屋さんごっこの体験をもとに、本当のケーキ屋さんかどのような場所であるのかを確かめること。二つめは、本物のケーキがどのように飾り付けされているのか、どのようなケーキがあるのかを確かめること。子どもたちとの対話では「本物のケーキをつくる」ということは、3章かたどる>に示したデコレーションあそびから共有されていたためである。保育士にとっては、子どもたちによる本物のケーキづくりに備えて、実際に子どもたちがケーキを食べるか確かめる、また、子供用のクッキング包丁でケーキを切るという動作をすることが可能か



写真 4-1 ケーキ屋さんお買い物体験

確かめる、このような様々なくたしかめる>のためのお買い物体験である。保育士たちは、子どもたちのリアルなケーキづくりに向けての、リアルな体験を大切にしたいと考えていた。ケーキ屋お買い物体験および市販ケーキを食することについては、事前に保護者の承諾を得た。

子どもたちは前日からお買い物を楽しみにしていた。お散歩車に乗ると「ケーキ！」「ケーキ行く！」と興奮気味に喜んでいて、徐々に口数も減り静かになっていた。お店に着いてからもはしゃぐことなく、落ち着いた行動ができていた。子どもたちは集中力や注意力が高まると無口になり、真剣な表情になる。このときにも、そのような様子を示していた。お店に入ると、ケーキのショーケースの前にすぐに向かった。店舗内には周囲にクッキーや他の菓子類が手の届くところに並んでいたが、子どもたちは見向きもせずケーキに釘付けになっていた。そして非常に興味深いことに、どの子も指さすのは巨峰ののったショートケーキとハロウィン用のカボチャのプリンであった。カボチャのプリンは、ハロウィンが近いことから保育園の部屋で見慣れていることによると思われる。もうひとつの巨峰のショートケーキは、3章くかたどる>の空き箱ケーキのデザインに似ているものであった。子どもたち自身が、空き箱ケーキの制作と、ケーキ屋さんでのお買物が連続的な活動であることを認知していたと見ることができる。保育実践デザインによる効果である。

全員が指さした二種のケーキを購入することとした。園に戻り、篠の援助を受けながら、子どもたちは子供用クッキング包丁を使ってケーキを切り分け、おやつに食べた。生クリームが苦手な子どもも2名ほどおり、この体験の際のケーキはすべてを食べきることはなかった。購入したケーキの場合は残す子どももいたという事柄は、次の本物のケーキづくりにおいては重要な意味を持つものであった。

5章 つくる <本物のケーキを作る> 10月30日

本物のケーキづくりは、ケーキ具材について事前に調理師・高塩に相談し、食べやすいもの、切りやすいものを選んだ。1歳児クラスの活動であるため、ケーキのスポンジ台は市販品を購入し、子どもたちの作業は飾りつけの具材となる果物カットやクリーム塗りから始めた。また、予め、子供用とはいえ刃物を使うこと、生クリームを食することについては事前に保護者に説明し承諾を得た。

ケーキづくりに備えるため、この日は朝から泥遊びや砂遊びなどは禁じ、その理由も子どもたちに伝えた。併せて調理前に手はきれいに洗う必要性をよく説明した。開始後すぐ、包丁の取り扱いかたを説明し、必ず“猫の手”のようにして食材の上に手を載せ、刃物の下には手を置かないことを約束した。また、包丁を扱う際には、保育士が子ども一人の後ろから抱きかかえるように手を添え、一人ずつ切る動作を行った。クラス全員の子どもたちが果物を切る体験をした。

次にケーキのスポンジ台を見せ、篠が「これは何かな？」と子どもたちに質問した。「ケーキ！」と子どもたちが答えたので、「これはケーキのスポンジ台。ケーキに使うのよ」と説明すると、子どもたちは真剣な表情をする。篠は「まず先生が塗ってみるね」と言いながらヘラを取り、「クリームを取ったら、スポンジの上に乗せてヘラを動かして塗るよ。」と、その説明の行為を実践した。子どもたちはそれぞれ気に入っている道具を選び、クリーム塗りを始めた。子どもたちは作業に集中して黙々と、丁寧にクリームを塗っていた。篠が「できたかな？」と



写真 5-1 ケーキづくり(左上から右に向かって時系列に表示)

子どもたちはそれぞれ気に入っている道具を選び、クリーム塗りを始めた。子どもたちは作業に集中して黙々と、丁寧にクリームを塗っていた。篠が「できたかな？」と

声をかけると、即座に「まだ！」と言いながら、夢中で作業を続けていた。

飾り付けについては、子どもたちに任せた。3章<かたどる>で見たように、フルーツの種類や色合いのバランスを気にしながら、フルーツを置き直したり、よく吟味してのせたりしていた。最終的に写真 5-1 の3段め中央のようなケーキが完成した。

完成後、1歳児クラスの子どもたちと、0歳児クラスの K(1歳7カ月)でケーキを食した。4章で述べたように、市販のケーキは残していた子どもたちも、自分で作ったケーキについては残さず食べた。食育において、“自分で調理する”ことの効果が示された場面であった。

おわりに

最後に、篠と桑田のこぼれ話を記して、この活動報告のまとめとしたい。

「保育実践をするうえで、私たちは子どもとの対話をとても重要だと考えている。それが、今回の保育実践のプロセスに活かされていると感じている。

今回の活動の最初の目的は、1章<みたくて>で述べたように、始めて廃材に触れていく中で、素材の感触や音の違いを感じるなど自由な発想を引き出すということから始まった。その中で、子どもたちの発想や子ども同士のイメージの共有を見逃さずに拾い上げていくことで、ケーキづくりへの実践という<食育と保育の融合>へと発展を遂げた。

日常の保育でも記録を重要視しているが、発展しそうな活動が見られた時には子どもたちから発信された言葉や行動を細かく記録し、保育士間で常に情報を共有し、アイデアを出しながら保育実践を行うといったチームワークを大切にしている。また、その中には必ず子どもたちの姿を想像することを重視し、環境構成や教材の準備を行い、保育士同士のイメージの共有も大切にしたい。

今回のケーキづくりにいたる活動も、これらのことを保育実践において常に意識し、活動の流れを止めることなく、子どもたちの様々な意図を汲み取り、すばやく対応したからこそ実現できたと思う。

この二ヶ月にわたる保育実践を通して子どもたちの小さな発見や完成、集中力には驚かされることばかりであった。ままごと遊びは現在も少しずつ遊び方を変化させながら続いており、人形を世話したり、キッチンコーナーで料理をしたりと活動を楽しんでいる。保育実践を行ううえで一番大切なことは、子どもたちから生まれてくる言葉を私たち保育士はいかに拾い、対話し、そしてどのように活かして保育実践につなげていけるかだと実感している。」